

## 石丸晶子教授退任記念号の発刊に寄せて

キャンパスで石丸先生にお会いして会釈すると、必ず含羞の面に浮かんだ柔らかな笑顔と深々としたお辞儀が返ってきました。先生はいつもはにかみがちで、控えめで、柔和で、たおやかでした。

一方で、先生は熱い思いと信念の人でありました。私事ながら、私は石丸先生とほぼ同時期に本学に赴任し、現在の全学共通教育センターが一般部会と呼ばれていた時代から、遠くからではありますがずっと先生の言動に接し、先生の教育にかける情熱や学生を思う熱い気持ちに感銘を受けてきました。先生が定年退職される直前の全学共通教育センターの会議で、学生たちがバランスのとれた食事を摂っていない、大学教育のなかに食についての教育「食育」をぜひ取り入れて欲しいと熱弁を振るわれていたことがまだ鮮やかに思い出されます。

先生が大学の出版物に書かれたことや会合などで先生自身がお話になったことによりますと、幼少のころから病気がちだったとのこと。「私は四歳の頃結核にかかって以来、以後三十年間この病気が縁が切れず、中学、高校、大学、と休学を繰り返した」と書いておられます。大学で美術史学科と国語国文学学科のふたつを卒業されたとはいえ、大学院を修了されて教壇に立たれたのは40歳の直前のことでした。

おそらく、先生の長い闘病生活はいのちとの対話であったと思います。先生の学生や教職員、そして地域の人々に向けられた熱い、温かい思いはそうしたいのちとの対話に源流を持つものではなかったか、先生の温かさから、何か透徹した強靱なものが伝わってくるのはそのためだと私は常々思っていました。闘病の故にいのちを見つめる。そして闘病の故に、誰しもが抱く人生の欠落をより鋭敏に受け止め、その欠落を埋めようとする激しい情念の美しさにとらわれていく——文学者としての先生の原点はそこにあるのではないか、先生を遠くから拝見しながら思うことがありました。

ご存知のように、先生は1991年に『式子内親王伝——面影びとは法然』で第一回紫式部文学賞を受賞されましたが、この書物の末尾で、先生は式子の歌に漂う艶と華やぎについてこう書いておられます。「艶も華やぎも、悲しみが産み落とす子らであり、家庭的幸福に自足する心、悲しみを知らぬ心からは、艶も華やぎも生まれないのである。」欠落や不在こそが生の営みを突き動かしていくのだと先生は語っておられるように思えました。

石丸晶子先生は、東京大学大学院博士後期課程（国語国文学専攻）を満期退学されたのち、1977年に本学に赴任されて以来、29年に及ぶ長い歲月本学に在職されました。その間、研究委員長などの要職につかれながら、研究者として、また教育者として本学に大きな貢献をなさいました。先生は有島武郎の研究者としてつとに有名ですが、現代文学だけでなく、日本の古典文学に至るまで、研究業績はまことに多岐にわたり、日本の文学研究に大きな足跡

石丸晶子教授退任記念号の発刊に寄せて

を残されました。

さらには、西欧文学にも造詣があり、キリスト教や仏教など宗教にも深く通じておられ、その先生の文学の講義に魅了された学生を私は数多く知っています。先生の講義に魅了されたのは学生だけではありません。石丸先生は市民講座や市民講座の「卒業生」から成る生涯学習グループ「櫻友会」の講師として講義を続けられ、先生の講義を心待ちにする多くの熱烈な石丸ファンが生まれました。

また、先生は日本語教育にも力を注がれました。総合教育科目の「日本語表現」は石丸先生の発案で開設されたものです。国文学者、ジャーナリスト、企業人など多様な人材を教授陣とするこの科目は総合教育科目のなかでも学生の人気が高い科目ですが、その充実と運営に尽力されました。

この科目についてはひとつの思い出があります。この科目は開設以来2年生以上しか履修できないようになっていました。学生に人気があるのだから、1年生も履修できたほうがいい、私は単純にそう考えて、石丸先生に提案しました。しかし、先生は2年生以上でなければ絶対に駄目だと主張されました。何かを書くということは技術ではない。書くべき何かがあってはじめて言葉が生まれてくるのだ。1年生はまだその書くべきことを十分に持っていない。先生はそうおっしゃいました。先生はまことに信念の人でした。内容より技能が優先される気配がある昨今の大学教育のなかで、石丸先生の信念は貴重だったと思い返しています。

先生はいま大学の雑事から解放されて、思う存分研究に没頭されていることと思います。先生のご研究がさらに大きく結実し、新たな文学的境地を切り拓かれることを心から祈念しております。

2006年10月

全学共通教育センター長 寺地五一